

お念仏と共に ～ 如来に念じられて生きていこう ～



後藤さん一家・お稚児さんに勢揃い

日豊教区・四日市別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌

豊前後の各地から四千人が参詣

四月十九日から二十三日、大修理を終えた本堂で、日豊教区・四日市別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が厳修され、勝福寺からも九十名が参詣しました。



御門首直々の帰敬式

勝福寺のご門徒さんも二十八名が帰敬式を受け、法名をいただき仏弟子となりました。

二百人の稚児行列

二〇一三年より始まった四日市別院本堂修復も終了し、親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を無事迎えられたことは嬉しく存じます。

古くから四日市の中心であった両別院は今もなお人々の拠り所として大きな存在であり地域活性の一端を担っていることには間違いない事を門徒として、また地域の女性部の一員として法要の奉仕を通して改めて強く思いました。

この度の法要で行われる行事の一つである庭儀、稚児行列に今年五歳になる孫の泉寿が参加しました。

五十年に一度というタイミングに参加できたことはとても光栄で、孫にとってもよい思い出になるだろうと楽しみに当日を迎えましたが、普段とは違う装いに戸惑ったのか着替えに手を焼いておりました。



楽僧を先頭に西別院を出発

出発地である西別院の本堂へ行くに二百人も同世代の子たちが可愛いお稚児さんの装いでいるのを見て

稚児行列に参加して

深蔵加代子（閨）

安心してよう、いつもの娘や孫も驚いたよう、これを機にもっとお寺に親しんでおきたい、そしてまた孫の子たちが五十年後の法要で稚児行列に参加し、



稚児に先導され御門首の到着



思い出すが出来る平和な世の中であつてほしいと御本尊様に願いました。

宇宙が始まって百二十九億年になるといふ。ならば、私の今朝の目覚めは 百二十九億年の目覚め」と言えないか。

地球ができて四十六億年たつという。ならば、私の今日の一息は 四十六億年目の一息」であろう。

人類が生まれて二十万年ともいふ。ならば、私の今夜の眠りは「二十万年目の眠り」である。

ああ、生きてあることの、なんと不思議なことか。

お釈迦さまが涅槃に入られてから二千五百年になるといふ。私に芽生えた 南無のこころは、お釈迦さまからはるばる届けられた贈り物でした。

親鸞聖人がお浄土へ還られてから七百五十年がたつという。私の口から出てくる「ナンマンダブツ」は、親鸞聖人が遥かに待ち続けて下さった「ナンマンダブツ」でありました。

ああ、よくぞ、お釈迦さま、親鸞さまは、曠劫来流転してきたこの私に、お念仏をお届け下さいました。

釋知道

答えを持つ

真宗の教えは「生活を通しての教え」だと思えます。17年間、インターネットで「日替わり法話」をしています。そのメールアドレスには、「心の叫びを聞いてほしい」とたくさんさんの悩み相談が送られてきます。悩みを持つ人の共通点として「答えを持っていない」ことに気づかれました。

人はなぜ悩むのか？ 苦しむのか？ それは、生きていることに白黒をつけたがるから。自分を中心に、善か悪か、プラスかマイナスかを考えて、プラスの側を生きていることが幸せだと思っています。

増上慢・卑下慢

人間が必ず持っている比較する心を「慢」といいます。「正信偈」に「邪見橋慢悪衆生」とあります。自分を中心に上げたり下げたりします。認めてもらいたい時には「慢」の心を活発

化し、自慢して優越感に浸り有頂天になります。これを「増上慢」といいます。親鸞聖人はこのような世界を他化天といって最も安定のない不安な世界と教えてくれます。そしてパチンと叩かれると「慢」を落とすので劣等感に浸ります。これを「卑下慢」といいます。そして体と心のバランスを崩して鬱病等の心の病にな

私は何のために生きているのか

川村妙慶さん



ります。

問いを学ぶ

親鸞聖人は自我の思いの中で生きることが人間らしく生きることではない、現実、事実の中で生きるしか出来ない「住不退転」だと教えて下さいます。仏法を頂くとすることは今の自分に驚くということですが。親鸞聖人がいうご利益はこの

終わりではないよ」と問いを学ぶことです。

お寺に来て大切なのは、自分の根性を叩き直すとか、いい人になるとか、皆から褒められるためにあるのではなく、しっかりと自分自身が仏様の教えによって照らし出されて「こんな私でした」と驚かされるのが仏法に出遇うという事なのです。

事実に驚かされることです。年を重ねるほどに驚くという事、感動が少なくなりますね。「人生はこういうものだ」と答えを持つからです。「答えでなく問いを持ちましょう」と先生から言われました。ケンカして、病氣して、何で今日まで気付かなかったのだろうと立ち止まらせて頂く。真宗の素晴らしい所は「ここで

大谷専修学院へ
門司港にある西蓮寺という寺の娘として生まれた私は高校3年生の時、住職である父が布教の途中亡くなりました。兄は後を継ぐ事を拒否して引きこもり、二百件あった門徒は全て他へ移り0になりました。母が教員をしながら何とか寺を守っていましたが、私に後を託しました。アナウンサー

事がしたく松竹芸能に入りましたが、思うような仕事はなく三毒の煩惱にまみれる毎日でした。学院の先生が苦勞して来いといった言葉が解りました。あのまま学院にいたら聖典の言葉を驚嘆みして生きようという心を見透されていたのです。私の仕事は父が残してくれたお念仏を相続する事だと思つて33歳の時に西蓮寺に帰りました。兄は相変わらず引きこもっていました。心を開いてくれました。元同僚の縁でお寺の状況がテレビで放送されると門徒も戻り、兄も学院で学び住職に成りました。私は40歳で京都のお寺にご縁を頂きました。そして今、書籍やラジオ等を通して親鸞聖人の教えをお届けさせて頂いています。

【所感】私も後継ぎではありませんでしたが縁あって僧侶(住職)に成りました。「現実とどう向き合っているのか」「答えを持つという生き方」を学びました。(御堂成司)

お寺de縁日



御遠忌協賛事業として、五月十四日に《お寺de縁日》が開かれました。昔のお取越しのように、境内にはお店が並び、ゆるキャラやバンドで、一日中子ども声があふれました。



女性門徒のつどい
次世代につなげよう、念仏のひびき

五月十八日には「女性門徒のつどい」が開かれました。愈漢子先生の記念法話、テーマ感想発表、歌に踊りにバザーにと、坊守会と婦人会が一緒になって、お念仏のこころを確かめました。



御遠忌
これを勝縁(チャンス)として「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」と申してみませんか！

鳥に獣に草木にかよう息とかやと念仏を味わわれた人もおります。一日一回は一息一息を「ナンマンダブツ」といただく生活を始めることが「御遠忌」(または「ご法事」)に出遇えたということです。

今まで、信仰心のなかつた私ですが、一昨年、主人を亡くし、朝夕のお参りは勿論のこと、何か相談したいこと、淋しくなったりした時など、仏前に座っていることが多くなりませんでした。何も答えてはくれませんが、仏前に話

御遠忌法要に出席して

渡邊泰美(常德)

主人は見かけによらず、親思いの優しい人で、苦勞して自分たちを育ててくれたとよく話してくれました。お母さんは今、施設に入所しています。が、今まで苦勞かけた分、できる範囲で親孝行し、家を守り、見守っていただけらと思つています。

真宗門徒の豆知識 純子

四月十九日より五日間にわたる親鸞聖人七百五十回御遠忌法要も過ぎてゆきました。尊い人の五十年毎のご法事を御遠忌といいます。家においても五十回忌をつとめるというのは、若くして死別した親兄弟がなければ遇うことはないでしょう。ご法事には朱ロウを用います。その人の死を忌み嫌う不幸事ではなく、お陰さまで仏性を届けていただきましたという深い喜びごとであるからです。「さようならだけが人生だ」という人もおれば「人生は出遇いだ」という人もおります。その愛別離苦を縁として空しく終わらない人生に転じて下さるお念仏を教えて下さった親鸞聖人の御遠忌です。

念仏は平和の祈り

街頭に立って (藤谷純子)



つアピール活動に参加して、平和憲法を子や孫に残そう！故郷を奪う原発を廃止しよう！基地ある限り平和は来ない。まず沖縄から基地をなくそう！と呼びかけています。

♪ふるさとの街焼かれ
身寄りの骨埋めし焼け土に
今は白い花咲く
ああ許すまじ原爆を
三度許すまじ原爆を
われらの街に♪

歌声喫茶時代の姉に教わって
よく二人で歌っていました。

仏教の十悪業の一番目が殺生です。原始仏典の『法句経』には、「すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとつて生命は愛しい。己が

身にひきくらべて、殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」と教えられています。戦争になれば、さるべき業縁のもおし次第でなにをしないでかすか、恐ろしい自身を生きねばならぬことになるでしょう。

今、私は仏教徒として、念仏申す者として、親鸞聖人の「世の中安穩なれ、仏法弘まれ」の祈りに励まされながら、月一度のダイエー入り口に立

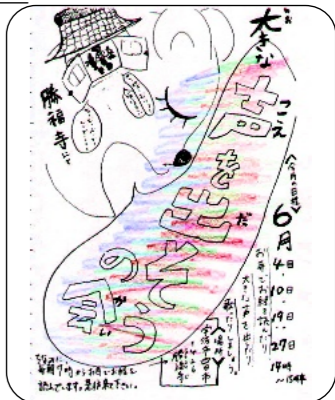


作ってみませんか！
おいしいですよ！
懐かしいばあちゃんの手作り
おやつ『かんころ餅』

かんころ餅

かんころ餅の材料は、とうもろこし(きつまいものこと)を蒸してうすく切り、天日で乾燥したものを粉にした「かんころ粉」を用います。作り方は、かんころ粉に小麦粉を少しと水を加えて練り、丸めてゆで、ゆで上がったから黄粉をまぶします。黄粉には白砂糖、塩はつたい粉を混ぜるとおいしいです。昔は黄粉のかわりに麦を炒って粉にしたはつたい粉を使用していたそうです。

現代は見ばえのよい色んなお菓子が出回っていますが、ばあちゃんの作ってくれたおやつには食べ物を大切に工夫して頂く心がこもっています。子や孫に自然の恵みのありがたさや作る人の愛をこめて食べてもらいたいですね。



「もう既に共に生きてくるといふことを見失ってしま、自分の思いの中理もれ、より通じ合えなく、ふかり合えなく、一人の人の深さ、面白さを見失、ていく、自分思いは置いて、みんな、大きな声を出し、今だけの共鳴の中に身を置きましよう。
【今をア】から始めよう。
【大】きな声を出そう(会)信風
6月19日午後5時 藤福寺

【あとがき】

なんだか世界中が、ヒステリーを起こしているような状況になってきました。人間にとつて何が一番大切なのか、御遠忌はそれを考え直すよきご縁です。「彼岸会法話・ご門徒さん」多々のことを学ばせていただきました。勝福寺に春から新しい風が吹いています。さわやかで、軽やかで、きらきらしています。皆さん風に吹かれに来て下さい。(知道)

輪島から宇佐へ



村田風 (むらたふう) です。私は石川県の中の曹洞宗のお寺で生まれ育ちました。周りの四軒の子供たちと山猿のように野山を駆けまわり、大人も含めみんなして毎日ご飯を共にしたりと、のどかにのんきに暮らしていました。家に来山者が多く、大人達にぎやかに何か楽しげに過ごしている姿を小さい頃から

目にしていました。そういう大人も子どもも交ざってわいわいできる場っていいなあという思いが、現在、こうしてお寺へと足を踏み出させたのだと思っています。こちらに来させてもらって、色々な方と交流する中で色々な言葉をかけてもらいながら、日々やらせてもらっています。こんな者ではありませんが、どうぞよろしくお願い致します。

門徒さん

こんいちには！

第四回

私は大正十四年十一月の生まれですから、今九十才と三ヶ月です。私にとってお念仏のご縁を下さったのは母の母であるお婆さんでした。お婆さんは明治元年の生まれで、子供のいない大家(おおいえ)の家へ十五才の時に養女に入り、やがて婿養子を迎えて十六才で私の母を産んだんです。次々生まれた四人の子が全部女で、肩身の狭い思いをし、自分の時代がなかったと言っていました。そんな苦労がお念仏の道に入るご縁だったようです。

お手次寺は正行寺でしたが遠かったので蠣瀬(かきせ)にあるお西のお寺さまへお朝事に参っていました。家でも毎朝ご飯の前に、お婆さんがお正信偈をあげ、その後に母に兄・姉・私・弟が並んでお参りました。最後に

*人に対して今日一日を、私は笑顔で親切に。
*仏に抱かれて今日一日も、私は往きますお浄土に。
と唱えるんです。弟が「私は往きますお浄土に、私は往きますお浄土に」と繰り返すと、お婆さんが「お前はいい子じや」とほめるんですよ。それからご飯をいただくんですが、毎朝お精進で、だしも昆布でとっていました。私はずっとそれがあたり前だと思っていましたよ。

兄や姉が優秀で、私はケタはずれに変わっていたようです。頭の毛は赤くちぢられてい

生き死には

お経様の響きの中で

外園治子 中津



うんです。途中忘れてしまつてね、原稿を見ながら話終えた時、ご門徒の婆ちゃんが「どこの嬢ちゃんやろうか」と言つて押んで下さいました。その後何かにつけて私が「明日する」と言うのと「その日のことはその日のうちに。《明日ありと思う心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものは》親鸞様はこうじゃったろ」って言

われたものです。お婆さんが毎朝お湯でのぼしてとかしてくれて「お前は何でこんなんじやろう。心の素直な子になれよ」と言われて、本当に可愛がられました。

小学校四年の時にこんなことがありました。お客僧様が風邪で来られないことになつて、代わりに高座の横にイスとテーブルを置いて、父が親鸞様のお得度のお話を紙に書いてくれ、私にそれを読めと言

人です。途中で忘れてしまつてね、原稿を見ながら話終えた時、ご門徒の婆ちゃん

家でみそ汁と漬物の朝食をいただくことをしていました。それでお経様が私の耳に入っています。身につけているんですね。

父母は子供をさん付けで呼ぶ人でした。私の名が「治子」というので、「ハルが来た」と友達からからかわれました。それで父に、何でハル子って付けたのと聞いた

ら「そのハルでない、治は自分をおさめるということだ。自分の意志をしつかりもつて付和雷同するなよ」、これが父の教えでした。私が二十才の時に父を看取りました。

母も養子とりでしたので「どんな苦しいことがあつても帰るところがない。でもお念仏を称えれば心が安まる」と泣いていましたね。父の看病をしながらお三部経を写経して綴本にしていました。そんな母は九十才で亡くなり、私が、最後に「お念仏が出る」と嘆きました。でもいつの間にかお念仏申しているの「お念仏が出るじゃない」と言ったら「あ、よかった」と言つて、それが最後でした

ね。私は父母、そして義父母、再婚してその義父母に義弟妹、それに夫と何人もを看取りました。今度は自分の番です。老いては一日が十日。一日の老いは十日分です。私が今こうして安心して生きておられるのはご近所の皆さんのお蔭なので、ご近所の人にお別れがしたい、そんなお葬式がしたいですね。

(聞き書き 藤谷 純子)